

きもの無きに非ず、唐書波斯傳の記載に依れば『隋末突厥葉護可汗、討殘其國、殺王庫殺和 (Khosrose) 其子施利 (Schirée) 立、葉護使部帥監統、施利死、遂不肯臣、立庫殺和女爲王、突厥又殺之、施利之子單羯、方奔拂菻、國人迎立之、是爲伊怛支 (Ardaschir)』と、されば拂菻と波斯との關係は地理上より、又た政治上より甚だ密接にして、同書拂菻傳に『東南接波斯』とあるは、誠に正當の記事なるを認むべし、唐と波斯との關係は太宗以來極めて密にして、殊に高宗の時代には龍朔元年以來、波斯地方をも羈縻し、其の王家の一族を保護するに至りては、之が隣國にして波斯との關係淺からざるのみならず、唐とも古くより直接に交通せし拂菻に、此の地方の事に通じたるべき波斯人を派遣して之を招慰し、以て波斯地方を安んぜんとするは、誠に有り得べき事として認容するを得べし、銘には顯慶年中阿羅憾が召されて官職を授けられしことを記して、『又差充拂菻國諸蕃招慰大使』と記すのみにて、此の差遣が何年なりしかは明確に知り難きも、上記の事情より考がふれば、必らず此の龍朔置州時の事なるべく、従がつて顯慶年中とするも其の末年、即ち龍朔に接せる年の事なるべし。以上の管見にして誤らざれば實に此の一節は、唐と拂菻との國交に關して全く新らしき一個の材料を供給したるものなりといふべし。

三 宣傳聖教。

茲に所謂聖教が何を指すものなるかに就ては、前述の如く阿羅憾の國籍と、拂菻國に使したりとの事實より推考して、略ぼ之を子ストル教と解釋するの外、適當なる論據を知らず、然かもまた之を祆教と考へ、或は摩尼教とも見得られざるにも非ざるべけれど、摩尼教の唐に傳はりしは、武后の延載元年拂多誕 (fur(as)tadan? Chavannes et Pelliot. Un traité manichéen en Chine.) の至りしを以て初めと爲すと傳へらるれば (佛祖統記 卷三十九) 其の以前既に